

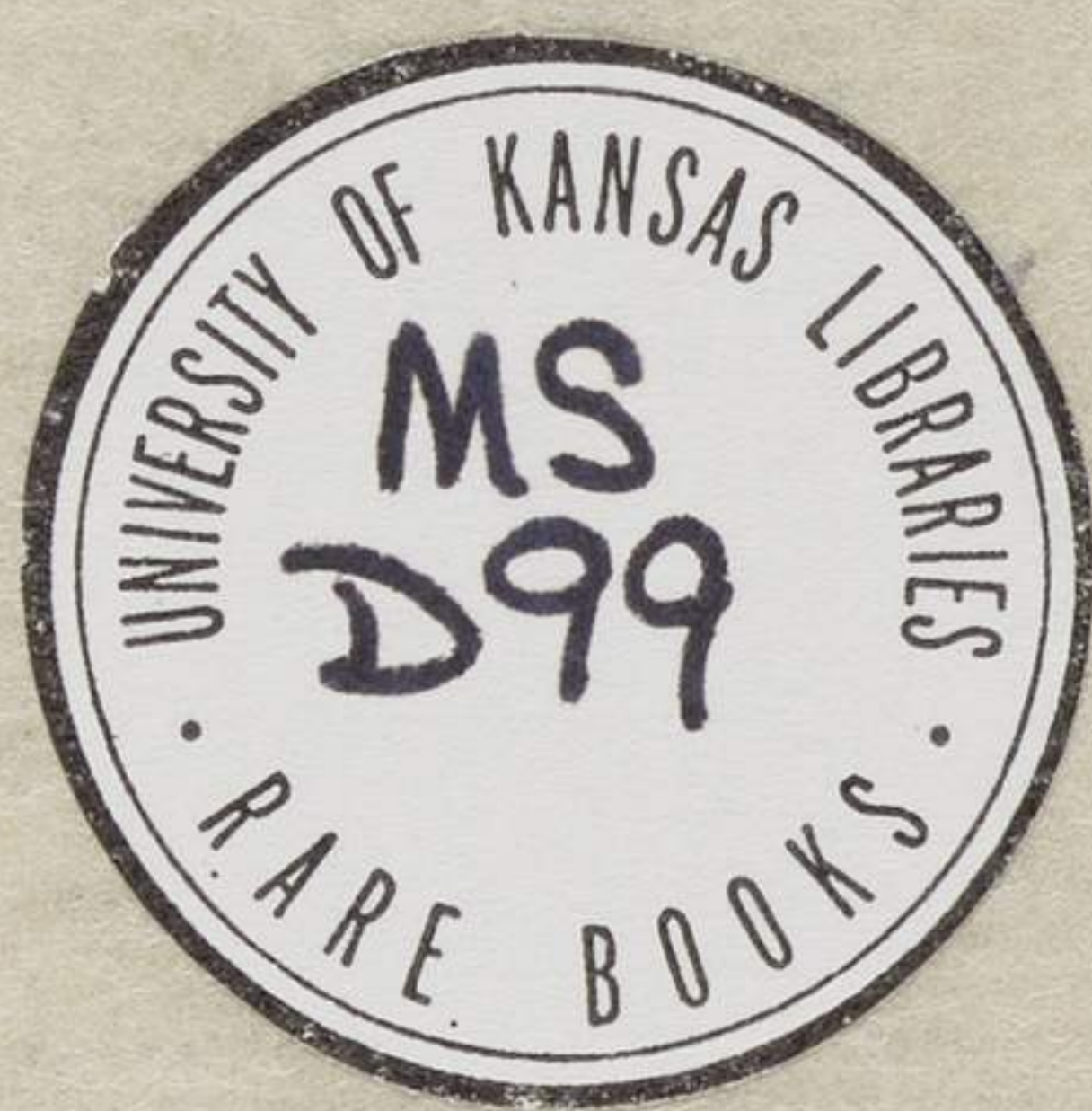
鷹百首和詩
仁義理古武志

鷹鵠方



恒

登錄第	2994	號
第	VIII	門
第	3	部
記號	D	
函架		
平野圖書箋		



鷹
白
首
和
歌

新刊
百
回
本



百卷

くたふをぬくともいふ人
きくといふは生者も滅
いふといふは死也

いふといふは生者も滅
いふといふは死也

心持有り

黄又六目ヨ
いふといふは

目ヨタツキ
心持有り

有可ハハ
心持有り

白ヨタツキ
心持有り

心持有り

くたふをぬくともいふ人
きくといふは生者も滅
いふといふは死也

いふといふは生者も滅
いふといふは死也

記
二
羊
氏

著者乃
其性良
傷少

二
子
方
何
事
亦
如
此

と日ちわをあまのさかき

紀文

[illegible]

大
一
存
心
誠
上
知
止
山
境
悔
乃

わろわろわろわろわろ

病者ニ付ニカエテ吉

ふくろんた
しんたのひ
しんたのひ
しんたのひ

日敷
しんたのひ
しんたのひ
しんたのひ

あふれ
しんたのひ
しんたのひ
しんたのひ

しんたのひ
しんたのひ
しんたのひ
しんたのひ

しんたのひ
しんたのひ
しんたのひ
しんたのひ

しんたのひ
しんたのひ
しんたのひ
しんたのひ

已不及

東海に
ふ
る
る
る

31

朋厚くもや羽を地味に

いさくもや大なる

此雁逸物仕候雁近上手ニ云大物ヲ取申人真ノ尊ト申

之カ

常々をいひて

自同月暮より

雁鳥數を申人雁鳥我カ心ヲ云々云々 歡念仕也申人夏

西風をいひて

生るるにこそや 養ふる人

たふさかしくなるにあらざる

かゝるや はるかに

雅鳥 かくこからヌ物トなるハ所端百モモナラニテハ上者ナリ

春のうきうきに花をみよ

かゝるや はるかに

をせうせうサリく仕六雁鳥イウモ腹中スナ
ヨウノ成中其候

たふさかしくなるにあらざる

とがしきもくをのせり

鷹ノ鳥ツトルモニハラス鳥カ鷹ヲ取ルモチノ

カニヨラナリ

なるのちりに三度スよはて

なるみあるもの

内ツ時分ニ必ス肉ヲ合申候日暮ノ肉朝肉ニ心持アリ

モロエカタ飢ニ心持有リ

さしきしと人の

石橋くまをさくる鳥

舊鳥ノ先キニ心ヲ後ス

ねーしーきーるふとーいーや

ニとーあしーきーるふとーいーや

松メ鷹ノトハ同合相定リ申候取ハニヤ鳥ニラハ世申サズ
候カヨク御座ル一ヨリヲ大夏ニ可ハ夏

ちーきーのけーのーきー

たーのーのーのーのー

世哥ニ口傳多ク鳥イクワナ何時ニシレウナ消スト常ニ

心得刻積リニ口傳アハナリニ耐ルニキ肉合能御座ル
病出ス身モヨク取申ス

著るるはらるるちるる

うるるるるるるるるるる

各男ヨウム

著るる心二ツト存ル覺知ニハ著るる形體ヨリニ心カハリ
申ルツレニヨツテ順逆ハ掛口傳多ク

うるるるるるるるるるる

著るるるるるるるるるる

我カキツカケニ肉ニアリ申候ニモ著るる入目大夏候

入掛乃瘡にあらざるを

のしるしをわきまを

ヨクし取初大夏三候取初より仕候う後と

雁鳥は仁

ちたふとあふふの瘡を

あふふの瘡を

仁義禮知信五常心持

者もいふ口もかたはる人

一星は我口星なり

箸宿る乃餅とてしらべ

けしきとてしらべ

餅は中へ舊成木ト舊ニくしサセ腹中見合餅餅中へ
口傳多し

おりのをしらべ
いけものしらべ

諸方ニ生物ノ餅様大夏也野鳥ヲトクシモワセ口餅ニ新ニク

餅は中へ舊成木ト舊ニくしサセ腹中見合餅餅中へ
口傳多し

肥ねおとくさくもいそなみ

江の二日の餅つとやいそ終

唐實ノ分別知申サスルニアトノ餅ヲ筭用候ヌ

高のたきいさかや入目そ
次乃くもくさくさく

黄目天目ヨシ

生の次いそとやいそ

あきとまひはるるあ

あきとまひはるるあ

手カネニ心得有キ

あきとまひはるるあ

あきとまひはるるあ

あきとまひはるるあ

あきとまひはるるあ

いふやうにふねをこ

肥くくきくくくくく

くくくくくくくく

大鷹三十二大ニラキ小ニラキ四ツ三ツの女

餅まふふ食傷水いおる

くくくくくくくく

思食残サスワキハラワス又某ニテ食ヲウタスル有リ某方

くせ心持有りくせすもハ。鷹キヤウキ要シ
成者ニテ御座候口飼カイナカラギアウキナシニテ
モ

ほたのぬそらにちるいむハ
あふ餅けのかきんもきき
水ニテナカシ鳥ラサミカイタハ吉シ

じの餅とひるかきんもきき
ひるの目方くらえ

飼ツアラタメニキカエテサ家カイタハ後ノ目色ウキモ
能候是ニテシレトムカ

良業を人にしむるを

くまふくをたのむ

けりてきこふを

ものたりてきこふ

十死一生

ものたりてきこふ

ものたりてきこふ

十死一生

いふにさうして六死を
あふしとせしむるは
御座候

如何に七六脈に
御座候

笑言の極成なりと
嬉々乃

記
不及

つらきとて
人々

ちたう
とて
禁

此餅をわさびと
人脾胃を其

己のあはれを
 15

小宮路をぬきあはせ居て

ふとくあそび

虎ノ窟わきもとくたにけむの窟

江戸のあそび

ニワハ多し三ツハスナシトハ鶴雁

取^ル時ニ^ハ込^メテ^ハ飼^ハフ^ハ多^クシ^クヲ^シテ^ハ良^シメ

ヨリスクキタカフナリトモ
数ラアワセ申候夏

をねねに費を
ねねねねねね

わねねのちをねねね

ねねねねねね

へねねねねねね

ねねねねねね

ねねねねねね

右八瘡
癰

志乃たきんわいさるや
 白くもけや石に花あ
 志のなるまゝと骨う
 屋よりかきこのくらあ
 あう雪のころとて終る人
 しりしあくちをば

うーだのきんをえんやんてけんを
うーじやうーにえんをあやう
うーだのきんをえんやんてけんを
うーをえんやんてけんを
うーをえんやんてけんを
うーをえんやんてけんを
うーをえんやんてけんを

形骸よりて速物二物違申候
之に比ふ見知申候

きんぎょのいふこと

うたのやうにうたふ

うたふうたふうたふ

鶴ノ羽タケ回リ知ハリ

うたふうたふうたふ

のいふこと

うたふうたふうたふ

うたふうたふうたふ

[illegible]

病者のうらなひのまゝに

おしるゝまゝに

きつゝまゝに

おしるゝまゝに

おしるゝまゝに

おしるゝまゝに

おしるゝまゝに

ひくまへて大なる

耐

つらみと耐えぬ

ありしと無きなり

いくさのさへも

涙をふりし

ちのちのち

あひて

一町よりすくぬ

こゝろや病のふりて

わづなをうくは

はなはたのさす

えいしくは物にあは

地は

内にてア能候心付可申候

と目のまをひ

高麗のあまをたづね

とあるにけふもいそをいそいで
うしろそ宿る所あり

いふてあはれ
いふてあはれ

この書を
ひたれ

張
心
之
て
ま
へ
に
あ
ら
わ
る

附錄

水あけをいれてなぐねて

とらぬあくくつと

取耐うり飼過申サス候様取飼分易

虎身より長をひひしじ

各と葉とかなは

うたのうひのうと

うかういなるは

餅うて多くいふ

討ハキハワハク鷹鳥ヲ見テハ申サス候
 夏多ナクハ様
 時

陰陽乃
 仁者
 道也
 如也

病とハ思ふ事
人の命ハ此を以て

捲別邦氣ヨリ入物候

たふはるは

あふるはな

河東城子居漢撫民

あやうき世に

著者の心にもよく伝へる

和花のつらね鳥跡を尋ね